

「はっきり言うておく、あなたがたが地上でつなぐことは、天上でもつながれ、地上で解くことは天上でも解かれる(マタイ 18:18)」。

この地上での限りある何か、天上の永遠と結びついている、ということはぼんやり分かる。直弟子に限らず、それが私たちキリスト者の事柄であることも分かる。それでは、「つなぐ」とは何か、「解く」とは何のことなのか。今日の聖書箇所の前後を見てみようか。

直前の「二人または三人(18:16)」とは、兄弟の罪(18:15)に関する証人。そして直後には罪の赦しに関する記述がある(18:21)。すなわち「つなぐ」とは罪に繋がれること、「解く」とはその罪から解き放たれること。「つなぐ」か「解く」かは、罪に関わる私たち次第(18:18)。それが天上のことになる。

幾度も赦し続けた後の裁きを想定するペトロに対し(18:21)、イエスは「七回どころか七の七十倍まで赦しなさい(18:22)」と無制限の赦しを命じた。

教会の現実には赦しか裁きかの判断を迫られる出来事が起こるのかもしれない。だが、その底流には無制限の「赦し」がどっしりあることを自覚したい。

「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである(18:20)」。そんな私たちが「地上で心をつなげて求めるなら、わたしの父はそれをかなえてくださる(18:19)」。

二人または三人の祈りをイメージしてみよう。…あれっ、イエス様が先んじて祈っているじゃないか。いや、イエスの祈りに私たちが集められるのか。

私たちの祈りはイエスの祈りと溶け合う。するとどうだろう。「地上で解くことは、天上でも解かれ(18:18)」、父が願いをかなえて下さり(18:19)、この地上が神の国になる。

私たちの祈りはイエスの祈りで力となり、悔い改め、相互に罪を解き放ち合う。

甲府刑務所で、キリスト教の教誨を希望する受刑者 6~7 人と共に聖書を読む。讃美歌をうたい、聖書を輪読し、黒板を使いながら御言葉を語り、私が祈り、皆で「アーメン」と唱えて一時間。

先日「アーメン」と唱えると、ある種の信頼を感じた。人間性も、受刑の事情も、聖書理解も、信仰への関心程度も分らないのに、その信頼感は奇妙であった。価値を共有する同志や、ウマが合う仲間とは違う。キリストによる兄弟の感じ、とでも言えようか。

二人または三人がイエスの名によって祈り、イエスの祈りで響き合ったのか。施錠された鉄扉を幾回も通っての寒々しい場所に、教会が生じた。

「御言葉はあなたのごく近くにあり、あなたの口と心にあるのだから、それを行うことができる(申命 30:14)」。

「ごく近くに」とは、先んじてイエスが祈っておられること。「心に」とは、イエスの祈りによって奥底にある祈りが意識のレベルに浮上するから。「口に」とは、相互の声を介して二人または三人の祈りが私自身の祈りになるから。「御言葉~を行うことができる」のは、キリストの体である教会がそこに現れるから。地が天と結ばれるように、天の永遠がこの地のものとなる(マタイ 18:18)。

私たちの口から発せられる祈りは、人間の言葉であるゆえ、月並みな願望に聞こえるかもしれない。だが、イエスの祈りに溶け合う私たちの祈りは、天上の響きであり、そこで祈られた「御言葉は、それを行うことができる(申命 30:14)」。「わたし(イエス)の天の父はそれをかなえてくださる(マタイ 18:19)」。



《おまけのひとこと》

頑丈な堪忍袋だったのだろう 七回までも赦そうというペトロ イエスの堪忍袋はその 70 倍も大きいのか それでは足りまい 幾人の罪を赦しているか考えてみよ 愚かにも底が抜けているのだ